

満州の空



第一東京弁護士会会員

長島 安治

Nagashima, Yasuharu

1 陸軍航空士官学校

私は、大正15年生まれです。昭和18年に陸軍予科士官学校に入校しました。元々父が陸軍の軍人だったこともあり陸軍の軍人になるつもりでいましたが、小学校の先生のすすめで、昭和13年に中学校から7年制の旧制東京高校に入学していました。その後大東亜戦争が始まり、東京高校を中退して予科士官学校に入校したのです。

予科修了後は航空士官学校に進みました。航空機の発達に伴い、昭和12年に、地上兵科に進む陸軍士官学校とは別コースとして航空士官学校が創設されていたのです。卒業は昭和20年10月の予定で、実戦は経験していません。

航空士官学校は埼玉県入間市にありました。そこで1年間教育を受けた後に、戦闘機の操縦者に選ばれ、昭和20年4月に満州に行き、飛行訓練を受けました。既に米軍機による本土空襲が始まっており、本土で練習機の訓練を行うような情勢ではなかったのです。約1000名が10か所に分かれていましたが、私は牡丹江というソ満国境に近い飛行場で訓練を受けました。

牡丹江での訓練については、私はあのときほど一生で楽しかったことはなかったし、生きがいを感じていました。そのころは、資材も燃料も限られており、進度の速い者に集中するように、淘汰と言っていました。ふるいにかけるのです。複座の練習機で、後席の教官に伝声管で「馬鹿馬鹿」と言われながら飛んでいましたが、飛行時間二十数時間の後に最初に単独飛行を許されて離陸したときは、思わず「ララ赤い花束、車に積んで」（春の唄：昭和12年）と歌が口から出て一番を歌いました。その後も自分の技量が上がっていき、うれしくてしょうがなかったです。ふるいにかけて7割ほどになっていたのですが、私はそこに最後まで残っていたので、非常に誇りを持っていました。

卒業すれば特攻要員だということは全員が覚悟していました。ドイツの降伏により、遠からずソ連が侵攻してくるだろうということも予期していましたから、そうなったら、飛行機でソ連の戦車にあたれということになるだろうとも思っていました。

た。

8月9日にソ連が参戦し、機甲部隊が国境を越え、刻々とあと何kmという情報が入るようになりました。飛行場には爆弾も大砲もなく、ソ連の機甲部隊との地上戦に備える兵力はありませんでした。そのときは、本当に覚悟しました。これに対する作戦は、一人一人がタコつぼを掘り、地雷を持ってそれをソ連の戦車のキャタピラに踏ませて戦車を擱座かくざさせるというものでした。しかし、戦車はスピードがあるし、機関銃もあるのでうまくいくはずがありません。前の日までは、戦闘機操縦者として死ぬときは空で死ぬと思っていたのが、ソ連の戦車に踏みつぶされて死ぬ運命だったかと思って、しみじみ情けないと思いました。

しかし、練習機を南に空輸しろという命令で、4人に1機ぐらいしかない中から操縦士の一人に選ばれて、朝鮮満州国境の通化という、関東軍の司令部がある飛行場まで運ぶことになりました。練習機は航続距離が短いので、途中で燃料を補給する飛行場の情報を聞き、100kmずつ尺取り虫みたいに運んでいったのですが、ある飛行場についたら燃料がなく、何とか補給を受けてようやく17日に通化に到着し、そのとき初めて敗戦を知りました。2日遅れたせい、涙が出るとかいうことはなかったですが、その後貨車の順番を待っていたときに、この満州の空を飛ぶことは今後永遠にないだろうという感慨と、残りの人生で空を仰いで心の底から笑うということはないかもしれないと思ったことを覚えています。

2 復員

通化から朝鮮半島を貨物列車で縦断して釜山に着き、日本の輸送船が1隻だけ残っていました。ただでは乗せてくれず、苦力がストライキクーリーをしていたというので、苦力の代わりに豆かすを積み込んでやっと乗せてもらいました。夜に出航したのですが、玄海灘が静かで、月がこうこうと照っていました。途中、後生大事に持っていた小銃とガスマスクを海に捨てろと言われて捨てました。門司に着くと米軍の飛行機が我が物顔に日本の空を飛んでいきました。小さな男の子が来て家族はと聞くと、お母さんとお姉さんは米兵が来るので、乱暴されないようにと田舎に行っただけと言いました。こんなことで、「日本は負けたのだな」とつくづく思いました。

北九州の小倉に着き、持参の一人用テントで何日か過ごし、人間の航空士官学校に戻りました。無蓋列車で帰ることになりました。広島を通過したのは真夜中で、所々でたき火していました。後から考えたら死骸を焼いていたのですね。それが点々としていました。東海道線が通れず、北陸、奥羽を回って入間に帰りました。校長は、日本で最初に空を飛んだ徳川大尉として有名な徳川好敏中將で、私たちに、「きのうまでの剣をペンに持ちかえて、日本の復興に尽くせ。」という訓示を

ひと筆

されました。日本の最初のパイロットから、我々日本陸軍最後のパイロットへの訓示でした。

私は、満州から復員して、親兄弟が疎開していた埼玉の母の実家に戻りました。食糧難の時代に肩身の狭い思いでした。いろいろその後について考えていましたが、ある日、私に葉書が来ました。誰かなと思って見たら、満州で飛行訓練をしていたときの区隊長の武内大尉であり、一緒に大学に行こうと書いてありました。大学に進まなきゃいかんと。学費がないのであきらめていたのですが、叔母が学費を援助すると言ってくださり、それで大学に行く決心ができました。今でも、叔母に心から感謝しています。全く偶然の連続なのですが、私は、周囲の人々に大変恵まれていたと思います。葉書をくれた区隊長にも、本当に感謝しています。その後東大に入り、高等文官試験司法科試験に受かっていたので司法研修所に入り、2年間の司法修習生を経た後、弁護士になりました。

3 終わりに

せっかくの機会なので、戦争についての私の気持ちを申し上げたいと思います。

一つには、戦争中の日本の将兵による崇高な数々の行為がまったく無視されているということです。私は、これは非常に不公正なことだと思います。国を守る、同僚や部下を助けるために命を投げ出していったことは非常に崇高なことで、こういったことを忘れていくのは、日本民族にとって悲しむべきことだし、恥ずべきことだと思います。

いま一つは、何かというと不戦の誓いと言います。それはそれで結構なのですが、戦争をしたくないと思うだけで戦争が防げるわけではないと思います。なぜあの戦争が起こったのか、なぜ防げなかったかということについてもっと考えなければならぬと思います。